

MUSEUM

ミュージアム・アイズ

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

Vol. **73**
2019

特集

今甦る! 琵琶湖に君臨した王 雪野山古墳

—発掘30周年記念展示から—



写真：雪野山古墳石室内部（東近江市教育委員会提供）
右 | ゆきのやまくん © 明治大学博物館

Contents

- 展示&リサーチ …… 素晴らしき古墳との出会い —大塚初重スケッチ絵画展—
- 市民レクチャー …… 伝統的工芸品とマーケティング —デザイン思考からの新たな展開—
- 学芸研究室から …… 茨城県三昧塚古墳の金銅製冠
- 博物館活動報告 …… 特別展「見えているのに見えていない! 立体錯視の最前線」が閉幕しました
- 収蔵室から …… 製造工程見本
- 南山大学協定通信 / 図書室から / 博物館入館者数の動き / 団体見学の記録 / M2カタログ / 博物館友の会から





今甦る! 琵琶湖に君臨した王 雪野山古墳

—発掘 30 周年記念展示から—

東近江市教育委員会

令和の新時代を迎えた今日、「古墳」は、古代日本における政治社会の構造や外交関係を反映する独自の文化的伝統として、その価値が一層注目を集めています。また3世紀中頃から7世紀に渡る古墳時代は、律令制導入以前の古代国家成立への道のりでもあります。東近江市・明治大学博物館・明治大学文学部考古学研究室の主催による今回の展示では、未盗掘の状態が発掘調査された稀有な事例で知られる滋賀県「雪野山古墳」の出土品（重要文化財）を一挙公開し、近江の古代王者の姿から、古墳時代前期と呼ばれる古代国家黎明期の歴史を紐解きます。（展示情報は5ページをご覧ください）

展示構成と主な出展資料

古墳時代前期の社会 — 3世紀中頃～4世紀 —

大和盆地東南部において、大形の前方後円墳を中心とした古墳が築造される中、近江では前方後方墳から古墳の築造が始まり、やがて台頭する初期の前方後円墳が雪野山古墳です。



◀雪野山古墳平面図



▲竪穴式石室（西から）

古墳の築造と儀礼

雪野山古墳は四方を見渡せる山頂に築かれています。後円部には、全長約7mの竪穴式石室が北位に構築され、竪穴式石室内部は酸化第二鉄や水銀朱で赤色に彩られています。

古代王者の副葬品

竪穴式石室内部には木棺が据えられ、被葬者とともに副葬品が配置されます。三角縁神獸鏡をはじめとする銅鏡、豊富な漆製品や碧玉製玉類などの珠玉の宝物が揃います。



▲小札革綴青出土状況（南から）



▲銅鏡出土状況（北から）

雪野山古墳が物語る交流

古墳に副葬される宝物には、古代王権の外交の結果得られた品々が多数あります。雪野山古墳の時代には大陸との交流がうかがえますが、その後東アジア情勢の変化が古墳に表れます。

ここに注目!

古墳時代前期の副葬品といえば、銅鏡が華と**言っても過言ではな**いでしょう。雪野山古墳には、三角縁神獸鏡3面、内行花文鏡1面、**だりゅうきょう**龍鏡1面が副葬されています。いずれも**ないこうかもんきょう**鑄上りがよく精緻で、当時の美術工芸品としても出色の作品です。

銅鏡の魔力

銅鏡は、被葬者の頭部に3面、足部に2面配置されていました。暗闇の石室内でも光を反射する鏡面に上に配置し、その輝きで魔物を追い払い被葬者を守る「辟邪」の効果が期待されたことでしょう。特に卑弥呼の鏡で知られる三角縁神獸鏡には、道教の神仙思想がうかがえる画像や吉祥句が刻まれ、縁起の良いものであったと見られます。



▲冠をかぶり、肩に羽の生えた仙人の像

国内製の銅鏡

列島では、中国鏡の文様を模倣して鏡が製作されていましたが、古墳時代になってから比較的大型で、文様の変化が国内製と見てとれる鏡が出現します。雪野山古墳では、内行花文鏡、龍鏡が副葬されています。古式の三角縁神獸鏡と同時に出土することで、早い段階で大型鏡の国産化が進んだことがわかります。また被葬者の頭部に配置され、特別な存在であったことも想像できます。

兄弟姉妹がたくさんいます

三角縁神獸鏡は、国内で560面ほど見つかっており、鏡作り工人の出自と製作地の論争では、古式のもの中国の魏で製作され、その後日本で製作されたとする説が有力です。またコピー製品である兄弟鏡が多いことも知られ、雪野山古墳の三角縁唐草文帯四神四獸鏡は、兵庫県から静岡県まで、さらに出土地不明のものも含めて7面の兄弟鏡が見つかっています。



◀三角縁唐草文帯四神四獸鏡



▲雪野山古墳に副葬された銅鏡



▲中国鏡の文様を模倣して作られた龍鏡

日本の漆 古墳時代にも

漆塗製品は、9千年前の縄文時代から製作されていますが、古墳時代の副葬品にも漆塗が施されています。木質の部分は腐って無くなっていても、漆膜部分だけは残っており、とても強い素材です。雪野山古墳では、弓矢を入れる装飾的な矢筒である鞞ゆきとその蓋ふた、背負板が揃い、大変珍しい事例です。

壺形土器にどきどき

表面が細かに磨かれた赤褐色の鮮やかな土器は、副葬用に作られたもので、文様と形は東海地方の土器を模倣し、胎土は地元産の土が使用されています。木棺に被葬者を安置して副葬品を置いた後、土器から水銀朱をまく儀礼を行い、木棺内部の南端に立てた状態で置かれたと見られます。

▲棺内出土の鞞

◀壺形土器

古墳時代の宝石

硬質な碧玉と呼ばれる薄い緑から青色の石で作られた製品が副葬されています。なかでも鋏形石は、九州でつくられた貝輪を祖形にした腕輪形の石製品で、編年系譜上の最古相のものとして知られます。Y字形の儀仗ことしがたせきせいひんのような形の琴柱形石製品は、被葬者の頭部近くから出土しているため、頭の周辺を飾る葬具と考えられています。

▲石製品・ガラス小玉

小札革綴冑を復元する

小さな札状の鉄板を革紐で綴じた冑は、大陸由来の製品と考えられています。小札が完全な形でかつ分解できる状態で出土したことから、その数およそ145片を整理し、復元に成功しました。花卉状に開いた冠のような形をしており、王者の威儀具として、その被葬者像が浮かび上がりました。



▲小札革綴冑



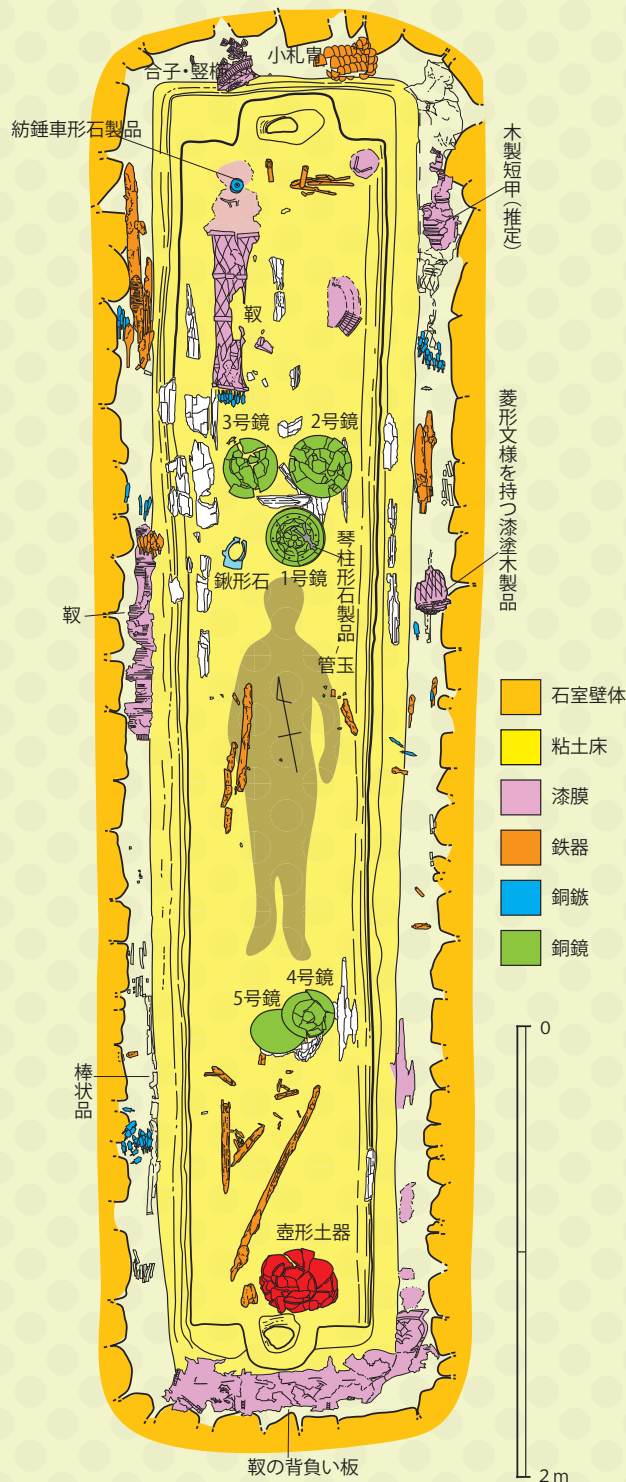
▲復元冑

日本刀のルーツ!?

古墳時代になると、長大な鉄刀、劍、槍やりが副葬されるようになり、これら鉄製武器の国産化が進んだと見られます。雪野山古墳では復元長96cmの刀が出土しましたが、これは当時のトップクラスの大きさです。槍は刃の部分やが54cmで、柄に施されていた漆膜が一部残っており、総長4.6mであったと推定されます。

▲鉄刀

竪穴式石室内の出土状況図



- 1号鏡：内行花文鏡
- 2号鏡：龍鏡
- 3号鏡：三角縁波文帯盤龍鏡
- 4号鏡：三角縁唐草文帯四神四獣鏡
- 5号鏡：采出銘三角縁四神四獣鏡

雪野山古墳へのアクセス



- 中央にある雪野山山頂に、雪野山古墳が位置します。
- 奥に見えるのが琵琶湖です。古墳から一望できるこの一帯が、被葬者の本拠地であったと考えられます。



- 東近江市は、滋賀県の南東部に位置し、東は三重県との県境になっています。地形は東西に細長く、東には御池岳から御在所岳につながる1200メートル級の鈴鹿山脈、西には琵琶湖があり、市域の中央には愛知川が、また南西部には日野川が流れています。この両川の流域には平地や丘陵地が広がり、緑豊かな田園地帯を形成しています。

※写真・図は東近江市教育委員会提供

information

雪野山古墳発掘30周年記念展示

今甦る!琵琶湖に君臨した王 雪野山古墳展

会期 2019年10月4日(金)~27日(日)
 開館時間 10:00~17:00(最終入館:16:30)
 会場 明治大学博物館特別展示室 入場無料
 主催 東近江市・明治大学博物館・明治大学文学部考古学研究室



東近江市埋蔵文化財センター



素晴らしき古墳との出会い

—大塚初重スケッチ絵画展—

忽那敬三

(明治大学博物館考古部門学芸員)

●…… はじめに

明治大学名誉教授であり、戦後の日本考古学を牽引してきた研究者の一人として知られる大塚初重^{はつしげ}氏は、数々の学史的に著名な遺跡の発掘に携わる一方で、調査などで訪れた遺跡のスケッチを描いてきた。主に古墳を画題としたそれらの作品群は大塚氏の自宅に保管されているが、当館の調査により総点数は665点にのぼることがわかった。作品の一部は、絵葉書や一筆箋などのグッズとして頒布されたり、長野市大室^{おおむろ}古墳群のガイド施設で展示パネルに使用されるなどして紹介されていたが、代表的な作品以外は公開される機会が少なく、いわば“知る人ぞ知る”作品群だったのである。

大塚氏の作品は、発掘調査や整備前など訪問時の古墳の姿を如実に伝えるとともに、古墳研究者ならではの観察の視点が垣間見え、美術作品としてはもちろんのこと、研究的な示唆にあふれた資料としても興味深いものであるといえる。また、多くの作品は大塚氏が明治大学を定年退職後に携わった生涯学習のフィールドワークの際に描かれている。北は岩手県から南は鹿児島県、海外にまで及ぶ作品の数々は、大塚氏の生涯学習に対する熱意が伝わってくるかのようである。

今回、大塚氏のご協力を得て、初めて大塚氏のスケッチ作品の全体像を提示するとともに、その中核をなす古墳を描いた作品を中心に38点を選び、企画展として紹介した。主催は明治大学博物館、期間は2019年5月11日～6月16日であった。作品の多くは絵葉書大の小さなものであったため、額装して間

近で鑑賞できる形とした。作品保護を目的とした場内監視のため、明治大学の博物館実習生、大塚氏の生涯学習での教え子である「大塚教室」メンバー、明治大学博物館友の会分科会の方々にご協力いただいた。

●…… 大塚初重氏とは

専門は日本考古学（古墳時代、文学博士）。1926(大正15)年、東京に生まれた。郁文館商業学校卒業後に海軍に召集され、乗船した輸送船が2度撃沈されるなど過酷な戦争を経験した。復員後の1946年に明治大学専門部2部（夜学）に入学し、考古学専攻を創設した後藤守一氏と杉原莊介氏に師事し、静岡県登呂遺跡^{とろ}、群馬県岩宿遺跡^{いわじゅく}など、戦後の日本考古学史を代表する数々の重要な遺跡の発掘に参加した。明治大学考古学専攻専任講師、助教授を経て教授となるが、その間、茨城県三昧塚古墳^{さんまいづか}・虎塚古墳、群馬県綿貫観音山古墳^{わたぬき}、大室古墳群などの研究史上重要な数々の古墳を発掘調査した。1997年の退職後は生涯学習教育に力を入れ、一般社会人向け講座である明治大学リバティアカデミーでは91歳（2018年）まで教鞭を執った。現在は名誉教授である。

この間、文学部長、考古学博物館長、明治大学理事を務めたほか、日本考古学協会会長、日本学術会議会員、山梨県立考古学博物館長などを歴任した。『東国の古墳』（六興出版）ほか論文・著書を多数発表し、2005年には、瑞宝中綬章を受章するなど戦後の日本考古学を代表する研究者の一人である。

●…… 大塚氏とスケッチ

大塚氏がスケッチを描き始めたのは明治大学在職中の1986年で、韓国の松鶴洞古墳群^{ソンハドン}が最初である。以後、2011年まで四半世紀の間に31冊のスケッチブックに描き綴られた作品は、実に665点におよぶ。画題は当初の10年ほどは研究目的の調査で訪れた海外の遺跡や明治大学の発掘の様子が主であったが、やがて生涯学習のフィールドワークで訪れた古墳で占めら



展示の様子

れるようになる。その範囲は東北から九州にわたり、受講生とともに、まさしく日本全国の古墳を歩いていた様子がうかがえる。

遺跡や古墳を描いた作品は、見学の合間のわずかな時間で線画（太い鉛筆あるいは木炭）を描いたのちに、宿舎で色合いを思い出しながら彩色（すべて水彩）して仕上げたという。いくつかの作品には、裏や余白にコメントが添えられており、大塚氏の当時の思いを知ることができる。本展では、コメントについて、パネル化して作品とともに展示した。

●…… 展示の構成

- ①初期の作品群…鉛筆あるいは木炭を使った太い線で描かれたものから、ペン画へ移り変わる様子を示した。明治大学で調査した大室古墳群、665点中唯一の考古資料のスケッチである天理参考館所蔵の人物埴輪、最初に調査担当となった思い出深い茨城県三昧塚古墳など。
- ②海外の遺跡…調査や生涯学習講座で訪れた韓国や中国の遺跡を描いた作品を紹介。
- ③風景画と静物画…瀬戸内の風景を描いた作品や、自宅に咲くヤマボウシなど。静物画は自宅や療養中の病院で描かれた花など、わずかである。
- ④東日本の古墳…最北の前方後円墳である岩手県角塚古墳をはじめ、東北～東海地方にかけての古墳を東から西の順で紹介した。今回は桜井古墳など福島県の古墳、大室古墳群をはじめとした長野県の古墳の作品を多く出展した。
- ⑤発掘現場の臨場感…奈良県島の山古墳・桜井茶白山古墳・愛知県東之宮古墳。調査中の埋葬施設の様子を描く。
- ⑥西日本の古墳…大塚氏がスケッチする姿の写真を紹介した京都府作山1号墳から宮崎県天下神社古墳まで、近畿・中四国・九州の古墳の作品を紹介。岡山県など瀬戸内周辺の古墳は緑を鮮やかに描いた作品が多い。
- ⑦学び舎「大塚教室」とともに…大塚氏が力を注いだ生涯学習講座の様子を写真や表で紹介。1994年以降、2014年まで実施したフィールドワークは76回に及び、リバティアカデミーへの出講は約20年にわたった。



京都府作山1号墳でスケッチする大塚氏（2001年3月16日、佐藤公昭氏撮影）。描画時の気分の良さ悪しが、作品の出来に大きく影響したという。

「桜井茶白山古墳の竪穴式石室」（2009年9月26日）。来場者の関心が最も高かった作品。

●…… 来場者アンケートから

来場者は37日間で4603名にのぼり、北海道から鹿児島まで全国各地からお越しいただいた。大塚氏自身も会期中に2度来場されている。明大OBや関係者、かつて生涯学習講座で遺跡見学に参加した方々からは、「作品を鑑賞しながら当時の思い出がよみがえった」という感想が多く寄せられた。

特筆されるのが、一般の見学者から寄せられた「東北地方に古墳がこんなにあると初めて知った」という感想の多さであった。また、「作品を通して古墳への関心が高まった」という学校教員からの声もあった。大塚氏は講座や書籍を通して市民への考古学の普及に大きく貢献されたが、今回の展示によって絵画作品という新たなアプローチの方法があることを示したといえる。今後の展示・普及活動を考える上で重要な示唆となった。

●…… おわりに

大塚氏は、スケッチを描くことを「鍛錬」ととらえていた（2003年「わがスケッチを語る」）。わずか数分の間に構図を決め、特徴を凝縮して描かれた作品の数々は、研究者の鋭い観察の視点がどこに向けられているのかを如実に示している。

加えて、大塚氏は作品を後から眺めると当時の様々な情景がよみがえる、とも述べている。最近では、デジタルカメラやスマートフォンの普及で私たちにとって写真がより手軽なものとなった反面、撮影しただけで満足してしまい、ともすれば以前よりもその時々情景が心に残らなくなっているのではなからうか。大塚氏の作品は、自らの手で描くことで、誰もが「記憶の玉手箱」を得ることができるというスケッチの素晴らしさを、私たちに教えてくれるのである。

なお、本展覧会の開催にあたっては、大塚初重先生ならびにご息女の小笠原文恵氏、本間敦子氏、「大塚教室」メンバーのみなさん、大塚先生のスケッチ姿の写真をご提供下さった佐藤公昭氏にご尽力いただきました。末尾ながら、記して感謝申し上げます。



2009.9.26

大塚氏

Atsuka.

伝統的工芸品とマーケティング

—デザイン思考からの新たな展開—

菊池一夫

(明治大学商学部教授)

1. 博物館商品部門のフィールドワーク

博物館商品部門は毎年、研究成果を学内外に発表するために公開特別講義を開催しています。そして公開特別講義は商品部門のフィールドワークの調査が基礎になっています。2016～2018年度につきましては、明治大学の創立者ゆかりの地である鳥取・島根の焼き物を題材に現地を巡り、行政担当者や焼き物の職人、経営者からお話を聞き、商品と現場を見せていただき、ということが課題になっているのか、それを解決する方法はどのようなものなのかについて丹念に調査をして参りました。

商品部門の研究の特徴は、商品がどのような工程で製造されているかを調査するだけではありません。職人の方々の会社の経営状況や、販路開拓、プロモーションについて、すなわちマーケティングの側面も重視して調査をしている点が挙げられます。これと同様に、どのように若手の職人が育成されていくかといっ

た人材の側面、事業承継、ブランディングについてもフィールドワークの調査で行っています。

さらに、公開特別講義についても文章としてまとめたものが『明治大学博物館報告』で既に発表されていますので、ご興味のある方はご覧ください。

2. 鳥取・島根の焼き物

鳥取・島根の共通した特徴は大きな産地が形成されていないことで、職人個人が経営者として独自の方向を模索するとともに、お店を出したり、展示会などに来店したりしています。問屋にたよって商品を流すだけでなく、職人の方が自分でお店を出して直接お客様と話をしながら商品を説明される。もしくは従来の百貨店の販売経路だけでなくそれ以外の販売経路も、ネット通販も含めて試みている点でした。これは他の産地でも見られる傾



牛ノ戸焼(鳥取):牛ノ戸焼 掛分皿



上神焼(鳥取):上神焼 絵皿



湯町窯(島根):湯町焼 大皿

鳥取・島根の焼き物
(館蔵資料から)

袖師焼(島根):袖師焼 酒器セット





料理を盛り付けて器を見せる（工藝 器と道具 SML 提供）



銀座・手仕事直売所（2018年/松屋銀座提供）

向です。売り上げが減少することによって、従来の問屋に商品を卸してから後は、職人は関与しないという考え方から脱却するという方向です。

大きな産地がないということはリーダーがおらず、産地全体としての取り組みがない点があるのですが、他方で個人が自由な裁量のもとで多様な方向性を模索していることが挙げられます。そのため、「産地全体としての特徴」を見出すことは難しい地域であると思います。

3. デザイン思考と焼き物

鳥取・島根は産地の特徴を見出すといった点でパターン化しづらいわけですが、独自の方向を模索する点で非常にユニークな点があります。それは「デザイン志向」を取り入れているという点です。この考え方は顧客の視点から物事を捉え直していくという「リフレーミング」が大切な考え方になります。

リフレーミングの事例として、これまでの公開特別講義から3つの事例についてご紹介いたします。ひとつは鳥取の事例、続いて島根の出西窯とデザイン会社のSMLの取り組み、そして最後は、百貨店の松屋銀座の「銀座・手仕事直売所」です。

まず鳥取では、行政の担当者が積極的に販路を開拓していきます。つまり従来の販売経路の問屋や小売店を介して商品を販売するのではなく、新たに行政の担当者がキーパーソンになり、県の営業パーソンとなって商品を精力的に販売していくのです。これは補助金のみ投下していく行政の在り方は大きく異なるアプローチといえるでしょう。

また島根県の出西窯では、東京のデザイン会社のSMLと一緒に製品の開発を行い、そのデザイン会社は消費者の生活を先取りした提案をしています。たとえば、商品が掲載されるパンフレットでも、お皿をメインにするのではなく、島根県の食材を盛り合わせた食事を彩るお皿という位置づけで提案します。つまりおしゃれな生活を彩るアイテムとして焼き物を見せているのです。

デザイン会社というプレイヤーが流通をけん引するという新たな形を私たちに提示しています。

工芸品の販売について新たな取り組みをする百貨店も出てきています。従来の百貨店では、たとえば「人間国宝の展示会」といったような売り方をしていました。しかし、新たに道の駅にヒントを得て、消費者と職人が気軽に会話をすることができる仕組みを構築している百貨店もあります。それが松屋銀座の手仕事直売所です。ここでは、職人のSNSで集客を行い、さまざまな職人と顧客を百貨店の会場に集めて、そこでの対話から作り手の商品への想いや使い方などを消費者が理解し、職人と消費者との間の絆を強化していくというプロセスを重視する手法です。職人から現場の話などを聞いた消費者は値段のことをあまり気にせず、購入に至るそうです。こうした手法はストーリーテリングとしても注目されています。ここでは百貨店はプラットフォームになり、さまざまな職人と多数の顧客（ファン）を継続的に結びつける役割を担っています。

4. リフレーミングと焼き物

焼き物をはじめとした工芸品は、わたしたちの誇るべき文化です。焼き物は各地の歴史や文化、生活の風習を感じさせ、多くの人のこだわりと努力をもとに作られています。しかしそれは、消費者の生活の中に自然に受け入れられ、日々使われなければ意味がありません。そういう意味では工芸品はいま大きな壁に直面しているといえます。

鳥取や島根などの調査や公開特別講義から私たちが学んだことは、これまでの考え方を異なる見方から捉え直す「リフレーミング」の大切さです。そういった意味では、従来の考え方（焼き物のつくりかた、売り方など）が十分に通用しなくなった時に、物事の切り口を変えてアプローチするデザイン思考は、現在、着目される重要な考え方であるように思えます。

茨城県三昧塚古墳の金銅製冠

忽那敬三

(明治大学博物館考古部門学芸員)

1. 三昧塚古墳とは

考古学博物館時代以来、古墳出土資料の展示の中でひときわ存在感を放ってきたのが茨城県三昧塚古墳出土の横矧板 銕留衝角付冑と横矧板銕留短甲である^{注1}。関東地方を代表する鉄製甲冑の例として知られ、2018年には国の重要文化財に指定されている。同古墳は全長87mの前方後円墳で、霞ヶ浦北岸の行方市沖洲に位置しており、1955（昭和30）年に干拓・堤防用の土取りで破壊されていたところを茨城県が差し止め、緊急調査が行われた。調査は県からの委託を受けて文化財保護委員会（現在の文化庁）の斎藤忠氏と明治大学考古学専攻の大塚初重氏（当時は助手）、茨城県文化課の川上博義氏が担当し、後円部表土下約3mから被葬者1名の人骨（鑑定によると推定身長162.5cmの成人代男性）と大刀・鉄鏃などの武器類、長さ数センチの鉄板を綴じ合わせて作られた小札甲、青銅鏡、数千の玉類などおびただしい副葬品を納めた組合式の箱式石棺、さらにその隣

から前述の冑・短甲と小札甲（付属具か?）、金銅装の馬具、武器を集中して置いたエリア（箱状の容器に収納?）を発見した。また、墳丘（古墳の表面）上では古墳を巡る円筒埴輪列と人物・動物・家形埴輪を検出するなど大きな成果が得られ、茨城県を代表する古墳のひとつとして評価されている。90m級の墳丘規模、鉄製武器・武具をはじめとするおびただしい数の副葬品、人物を含む多様な埴輪などから、5世紀末に同地域を支配した最上位クラスの首長であったと考えられている。

出土資料のうち、武具は明治大学博物館、それ以外は茨城県立歴史館にそれぞれ保管されてきた。1960年に発掘調査報告書（斎藤・大塚ほか）が刊行されたが、近年の重要文化財指定にあたり出土資料の再検討が行われ、現在の研究視点によってさらに詳細な分析が行われている^{注2}。

2. 金銅製冠の概要

数ある三昧塚古墳の副葬品の中でも最も

注目されるのが馬と植物の立飾をあしらった金銅製冠（図1）であり、当館の常設展示室でも写真を展示している。図では展開した形になっているが、中央のリボン状の装飾が正面にあたり、両端を後頭部で留める構造で直径は20cmと推定されている。被葬者の頭骨付近から出土したため、装着した状態で埋葬されたと考えられる。復元の結果、展開した長さ60cm、上部の装飾も含めた高さは12.6cmほどとなった。

冠の本体は中央が低く両側が山状にせり上がる「広帯二山式」に分類され、全体にわたり線彫りと透彫りによる文様が描かれる。周縁部は線彫りの波状列点文が全周し、内部は3段の透彫りによる文様帯で構成される（図2）。最上段および中段は、簡略化が激しいが八弁の花文、樹木花文、動物文（鳥、4本足の動物）が左右対称に配置され、最下段は連続波頭文となる（石渡・新井2004）。青龍や玄武に類する表現はなく、四神ではないようである。さらに、本体全面には直径約1cmの円形歩揺を80点以上取り付け、豪華に装飾している。

この冠を特徴づけているのが上縁の立飾

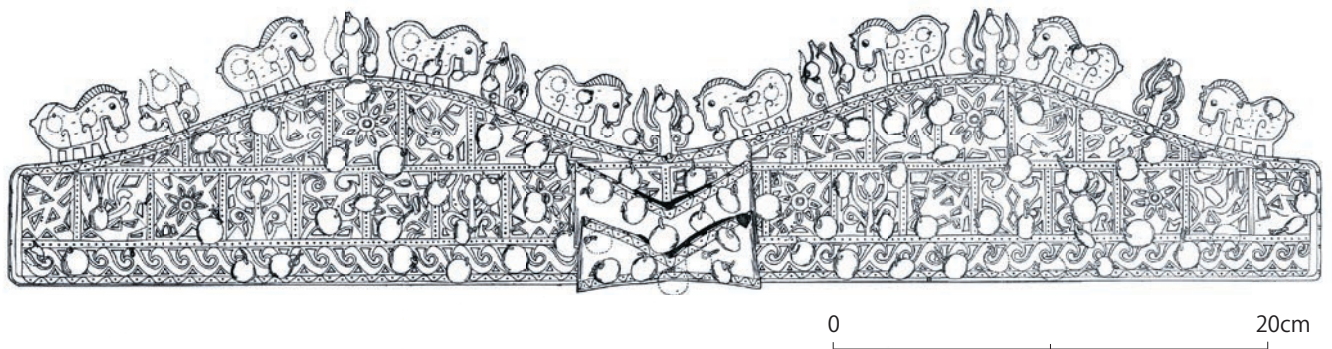


図1 | 三昧塚古墳出土の金銅製冠（斎藤他1960）

で、樹木形が7点、馬形が8点配されている。立飾にもそれぞれ3点ずつ円形歩揺がつく。馬形はたてがみが描かれ、胴部にわらびて蕨手状の文様がある。尻尾は馬形埴輪のように短く表現される。日本における古墳時代の冠の出土例は60点以上にのぼるが（毛利光1995）、本例は国内で唯一の馬形の立飾をもち、さらに全体が良く残っており、国内でも屈指の好例であるといえる。樹木や動物の立飾のモチーフから朝鮮半島から中央アジアの影響をみる意見もあるが（石渡・新井2004）、近年では正面中央の蝶形装飾が日本列島の織物製冠帽に由来する点、最下段の連続波頭文のルーツが百済の飾履や冠帽に求められる点から（土屋2015）、両地域の要素を取り入れて日本列島内で製作されたものと理解されている。

3. 金銅製冠の穿孔と性格

このように、国内出土の冠のなかでも優品といえる本例であるが、新井悟氏の検討（石渡・新井2004）以来、細部の状況について言及される機会は少なかった。以下では、現在の資料の観察とX線画像から得られた知見をもとに若干の問題点と性格について述べてみたい。本体周縁に開けられている2孔1対の穿孔について、報告書では記述のみで上縁と側縁のみ図示されているが（図1）、下辺の波状列点文帯の下にも連続し、全周する（図2）。これは報告書で述べられている通り内面に布を縫い付けるためのものとみてよいだろう。

一方で、本体の3段の文様帯の中にも歩揺が装着されたもの以外に区画帯や透彫文様の部分に2孔1対の穿孔が約80カ所みら

れる。報告書ではこの穿孔についても布を固定する用途と解釈しているが、周縁の2孔間の間隔が約1mmであるのに対し、文様帯の穿孔の間隔は歩揺固定用の孔に近い約2mmであることから、本来は歩揺固定用として開けられたものである可能性が高い。棺内は未盗掘であり、外れた状態で検出された歩揺の数はわずかであることから、一部は布の固定に転用されたとみられるが、穿孔はしたものの歩揺は装着しなかった孔であると思われる。

また、被葬者の耳付近から出土した2対の金銅製垂飾（長さ13cm）について、耳飾ではなく冠に装着したものと指摘がある（石渡・新井2004）。筆者もその可能性が高いと考えるが、外観やX線画像を観察する限りでは冠本体の耳に近い位置に垂飾の重量を支え得るような穿孔は見出し難い。周縁の布固定用の穿孔は冠の下部に接しようかという位置にあるため垂飾の重量は支えられないとみられ、連続波頭文下半に開けられた歩揺用穿孔のいずれかを利用したか、透彫り文様の間に繊維質（紐など）で固定したと想定される。いずれの場合でも、便宜的な装着方法であったといえよう。

こうした垂飾の簡易な装着方法、また簡略化が進んだ図像文様の在り方から、三味塚古墳の金銅製冠は厳密な規範のもとで製作されたものではないことがわかる。これは、従来指摘されている通り国内工房において生産されたことをよく示している。では、この冠はどのような場面で使用されたのであろうか。

広帯二山式冠の中には埋葬儀礼用に製作されたものが存在する可能性が指摘されている（土屋2015）。首長を表現したと考えられる人物埴輪でも冠を戴くものは多くな

い。また、立飾のモチーフは大陸との関係が指摘されているが、馬については、日本列島の動物埴輪に普遍的にみられるほか、西日本を中心に装飾古墳の壁画や装飾付須恵器の小像に登場するなど、日本列島の葬送儀礼にかかわりの深い動物であるといえる。また、馬の間に配された樹木形は房総に多い石製枕の周囲に差し込む立花にも外形が類似する。これらは、簡略化により一見して本来の図像がわからない本体の透彫り文様よりも、葬送との関わりが深いモチーフを強調して表現しており、この立飾こそが本例の用途、つまりはこの冠が葬送儀礼用のものであることを示しているといえるのではなかろうか^{注3}。一時の葬送儀礼のためにこれほどの冠を制作したとすれば、当時の人々がこうした葬送儀礼をいかに重視していたかをうかがい知ることができるのである。

本稿をなすにあたり、資料の実見およびX線画像の調査について茨城県立歴史館の小澤重雄氏にご高配を賜った。末尾ながら記して謝意を表します。

注1 茨城県所蔵、明治大学博物館寄託。保存処理・修復作業のため2020年度まで展示休止中。

注2 忽那・佐々木編2019「茨城県三味塚古墳出土・遺物の研究」『明治大学博物館研究報告』第23号 明治大学博物館。青・短甲・武器・鏡・繊維について収録。小札甲ほかを収録した補遺編を2020年に刊行予定。

注3 ただし、本体に多数存在する歩揺がない穿孔が、本来装着されていた歩揺が埋葬時まで外れてしまった痕跡と考えれば、葬送儀礼以前（被葬者が生きていた時期）に長期の使用を考慮する必要がある。

〈主要参考・引用文献〉

- 石渡美江・新井悟2004「冠の系譜—ユーラシアからみた三味塚古墳出土冠—」『学術調査報告書Ⅶ 茨城の形象埴輪』茨城県立歴史館
 斎藤忠・大塚初重ほか1960『三味塚古墳—茨城県行方郡玉造町所在—』茨城県教育委員会
 土屋隆史2015「古墳時代における広帯二山式冠の出現とその意義」『日本考古学』第40号 日本考古学協会

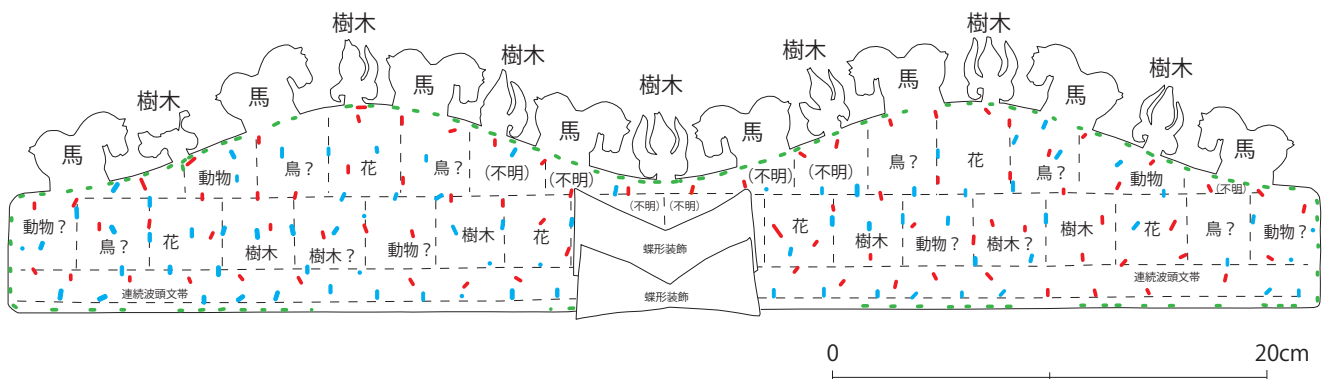


図2 | 三味塚古墳出土金銅製冠の文様構成と穿孔の位置（楕円は2孔を示す。赤は歩揺が残るもの、青は歩揺がないもの、緑はX線画像で確認できる周縁の穿孔）

特別展「見えているのに見えていない！ 立体錯視の最前線」が閉幕しました



去る9月8日（日）をもって本年度の特別展が閉幕しました。今回の特別展は、博物館の学内共同利用機関という役割から、明治大学の全学的な取り組みとして開催しました。すなわち、文部科学省選定の私立大学研究ブランディング事業「数理科学する明治大学」の成果を公開すべく、ブランディング事業の参画組織である先端数理科学インスティテュート（MIMS）及びブランディング事業の錯視学研究チームと共同で企画したものです。

今回の展覧会に出展された錯視立体作品は、近年ではテレビ番組でもおなじみとなり、台湾の故宮博物院をはじめ学外においても盛んに展覧会が開かれてきました。今回は研究の本来本元である大学自らが行う展覧会として独自のカラーを出すことに努めました。企画にあたって考慮したのは、ただ不思議な体験を提供するのではなく、そもそも錯視とはどういうことか理論的な側面に光をあて、錯視立体作品の制作が数理科学の成果に拠るといふ点をアピールすることでした。

錯視とはどういうことか？

人の目の網膜に映る図像は奥行き情報が欠落した2次元のデータであり、そこに3次元の奥行きを読み取るためには、脳による実際には存在しない情報の補完が必要です。その時、補い方がうまくゆかなかった状態が錯視です。奥行き情報を補うための手がかりの代表は、近くものは大きく、遠くものは小さく見える、平行線は1点から放射状に伸びる線の集まりとなる、などの遠近法的性質です。

立体錯視のしくみ

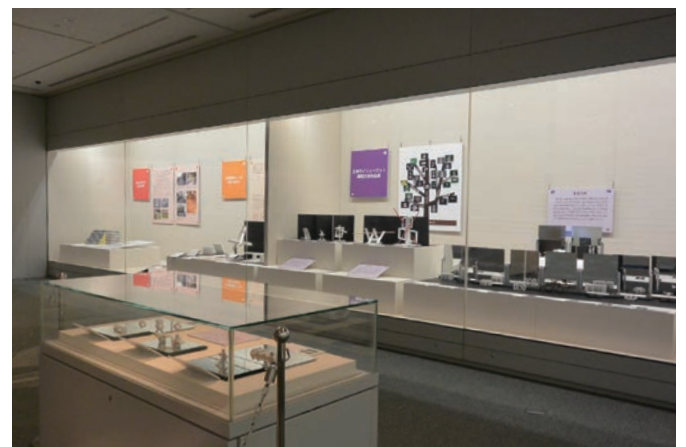
例えば立方体を描いた“絵”を人の網膜に投影された図像とすると、通常私たちは“すべて直角で構成された”立方体を思い浮かべます。しかし、この図像に一致する実際の立体—すなわち“立方体に見える立体”は計算上無限に存在するのです。そのため、

直角で構成された立体と直角以外の角度を組み合わせた立体を見せると脳は誤認します。この原理を利用することによってさまざまな錯視立体を創作できるのです。

数理科学の威力

錯視立体はその頂点を3次元座標に表現する計算式によって設計されます。角柱の組み合わせによる頂点の数が少ない「だまし絵立体」に比べ、複雑な曲線をデザインした「変身立体」ともなると、曲線は実際には多くの頂点で表現されていますので、とてつもなく複雑な計算式が必要となります。人間の直観では測りきれないような複雑な作業を可能にする手段として、数理科学の威力をあらためて実感しました。暮らしやすく安全な社会の発展に資する数理科学の進歩が期待されます。

展覧会は7月13日（土）に開幕し、夏期一斉休業期間をはさんで50日間、9月8日（日）まで開催し、合計2万2003名の皆さんにご覧いただきました。会期は終了しましたが、展示カタログ、記念のミュージアムグッズは引き続き窓口で頒布中です。また、現在、展示を記録した動画コンテンツの制作が進行中で、2020年の年明けには博物館ホームページの「博物館アーカイブ」のコーナーで公開の予定です。



明治大学先端数理科学インスティテュート（MIMS）

社会及び自然にかかわる現象の数理的解析を課題とする国際的研究拠点として、本学の研究・知財戦略機構に設置された。実社会とのかかわりを重視した数理科学の発展・普及を図ることを目的とし、生命現象、地球環境、災害、医学、交通、金融など、様々な局面で発生する複雑現象を数理モデリングで表現し、シミュレーションで再現・解明する現象数理学を展開している。

製造工程見本

製造工程見本

商品部門の特徴的な展示資料として約50点の製造工程見本がある。半製品を並べて文字通り製品の製造過程の概要を示すものである。前身の商品陳列館の開館以来収集が続けられ、現在は常設展やコラム展で展示している。約70年の歴史の中で製造工程見本はどのように収集されてきたのか。収集の過程と資料としての意義を見ていきたい。

当館の館蔵品は商品一般と伝統的工芸品の2種類に分類されるが、製造工程見本もその双方にわたる。これは開館時、商品陳列館が国内外の各種商品の製造工程・流通構造・消費実態の調査と研究結果、また貿易商品として輸出入された商品の公開・展示を目的として掲げていたことによる。そのため、初期には鉛筆や万年筆、フォーク、モンキレンチ、サンダル、眼鏡などの製造工程も収集された。1973年以降は収集資料の軸を伝統的工芸品に移したため、工程見本の収集も工芸品のみとなり、約50点の大部分を占めている。

収集過程

工程見本の収集自体は館の設立時から目的とされ、当初から主に収集していた原材料標本の使用工程を確認する意味でも重要視される資料である。しかし、通常こうした見本は商品として製造・販売されるものではない。商品陳列館はどのように収集を進めていったのだろうか。1995年以前は記録もほとんど残されていないが推測していきたい。職人仕事自体が現在ほど開放されていない状況下で、入手には困難がともなうと考えられる。その中で、第一に考えられるのは、既に産地の組合等で所有していたものを寄贈していただいた場合である。第二に生産者の理解を得て製作を依頼した場合である。上記2つの可能性に関して、開館時の収集は主に東京の百貨店においてなされたが、直接産地に向いた記録もあることから、その機会に産地の組合から入手した、もしくは製作を依頼したことが考えられる。収集した資料が該当す

るかどわかにはさておき、当時の文部省から製造工程の製作を依頼された産地が存在することが分かっており、産地には既存の製造工程見本が存在した可能性がある。1995年以降に関しては、種目ごとに展示した伝統的工芸品の中にそれぞれ製作工程見本を並べる意図があり、生産者に直接製作を依頼し、収蔵にいたっている。

製造工程見本の意義

このように収集されてきた製造工程見本だが、資料としてどのような意義があるだろうか。これはひとえに実物、「モノ」として見せること、残せることに尽きるのではないかと。現在、製品の製造元や行政のホームページ上に製造工程を紹介するようなページが多くみられるようになった。インターネットの普及によって我々が製品の裏側を知ることが出来る機会は格段に増加してきている。しかし、記録・保存という点では実物を残すということが重要である。特に工芸品関係は後継者不足が叫ばれる昨今において、その技術を継承する一環としても、大きな意味があると考えられる。

繰り返し述べるが、現在は製造工程を容易に知ることが出来るようになった。反して、実物の製造工程見本を収集することは相変わらず容易ではない。デジタルデータによる記録技術も発達した今、製造工程見本はコストパフォーマンスの悪いもののように映るかもしれない。だが、実物にこそ記録・保存の意義があるという点は、モノを通じた学習の場である博物館自体の存在意義にも繋がり、モノによるコミュニケーションの場である博物館ならではの在り方を表しているといえる。実物の半製品は、モノが持つ臨場感から映像や写真とは違った訴求力を持つ。これから商品部門の展示を見る方も、見たことのある方も、この機会に是非注目して見てみて欲しい。

(林田 真由子)

〈参考文献〉

・『明治大学商品陳列館50周年記念誌 商品陳列館の半世紀』
明治大学商品博物館2003年



左 | あけび蔓細工「きじばと」製造工程見本
右 | 尾張七宝 紅白梅皿工程見本

【2019年度第1回の特別講義を開催しました】

南山大学で「博物館概論（黒沢浩教授）」の1回分として、昨年と同じ「大学博物館の使命と機能」をテーマに在大学生を対象とする特別講義を実施しました（外山徹学芸員・5月24日）。当館の事業実践について説明するとともに、各地の大学博物館の事例を取り上げ、学術資料の管理・活用、創立者・教員の個人コレクション、大学の教育理念の発信など、近年活性化しつつある大学博物館の実情を説明しました。

【収蔵資料交換展示2019を開催しています】

相互に特色あるコレクションを交換した小規模展示です。
 会期：11月4日（月・祝）まで ※南山大会場は11月3日（日・祝）まで
 明治大学博物館会場：常設展示室 入場無料 会期中無休
 ※南山大学の会場情報は配布中のチラシをご参照ください。

あかいろコレクション

〈会場：明治大学博物館〉

今年の南山大学人類学博物館の展示テーマは「赤色」です。

まずご紹介するのは、弥生時代後期の尾張地方を代表するパレススタイル土器です。赤彩と文様が華やかに飾られ、墓からの出土例が多いことから葬送儀礼などに用いられる特別な土器であるという説もあります。タイの山地に暮らす少数民族の衣装も展示しています。一針一針手作業で刺繍された繊細で色鮮やかな模様をぜひご覧ください。他にもバブアニューギニアの木彫りの精霊像を展示しています。精霊像は通過儀礼や収穫儀礼などさまざまな儀礼において使用される特別な存在です。

それぞれの資料の赤色にはどのような思いが込められているのでしょうか。この展示を通して、赤色やその他の身近な「色」について考える機会になれば幸いです。



刑事博物館前史—拷問・刑罰の記憶と記録

〈会場：南山大学人類学博物館〉

我が国においては公然と語ることが、とくくタブー視されがちな拷問・刑罰の歴史が、史料上どのように継承されてきたかを振り返る展示です。実際、その関係史料は非常に乏しく、史実を再現する素材という意味において、果たして十分な質・量であるのかは常に自問することが求められます。特に江戸後期に成立した「刑罪大秘録」に負ってしまっているところが大きいのが、近代以降に成立した諸書を見ても歴然としています。

それでも、断片的な史料からは、残虐な拷問・刑罰がどのように記憶され、記録されてきたかを看取することが可能です。今回の展示では、これまで収集してきた稀少な拷問・刑罰に関する記録類を公開するとともに、江戸期から近代にかけて、それぞれの時代において前代の刑罰がどのように評価されてきたかについて注目してみました。



※その他詳細については、配布中のチラシおよび両博物館のホームページをご覧ください。



書評 『人類と資源環境のダイナミクス I 旧石器時代』

小野昭編 A5判 雄山閣 2019年2月 3,000円（＋消費税）
 ISBN：9784639026297

本書は、明治大学黒曜石研究センターが2011～2015年度に実施した共同研究「ヒト-資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」（研究代表者：小野昭）の研究成果を紹介しています。現在とは異なる寒冷な気候システムに支配されていた後期旧石器時代（約3.6～1.5万年前）、狩猟採集の生活を営む人々は、石器原料である黒曜石をもとめて標高1200～2000 mにある長野県中部高地の黒曜石原産地を目指し、居住地と原産地の間で往復200 km以上の旅を行っていました。本書では、最終氷期の中部高地原産地における過去3万年間の古環境変遷を標高1400 mの湿地堆積物からはじめて明らかにし、旧石器時代の黒曜石をめぐる人々の行動への環境変動のインパクトについて、発掘調査を含むフィールドから得られた独自の考古・古環境データにもとづいて明らかにしています。内容は専門的ながら努めて平易に物語られており、巻末には専門用語解説もつけられています。考古学、古環境学を専攻する大学院生から、こうした分野に興味のある一般の方々にお勧めの科学啓蒙書といえます。



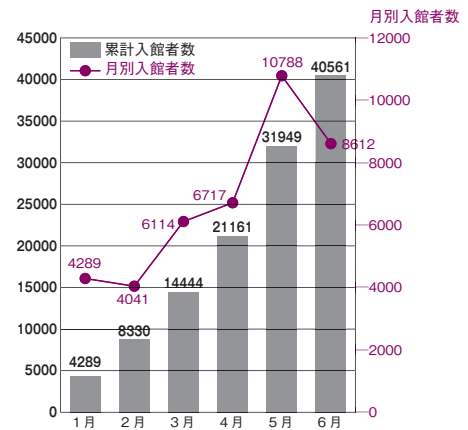
博物館入館者数の動き(2019年1月~6月:延べ人数)

2004年4月以降の
総入場者数累計

1,077,021人

1月~6月	延べ人数
図書室利用者数	2,086人
教室等利用者数	1,823人

特別展示室来場者内訳	開催日数	来場者数
3/23~4/21 新収蔵・収蔵資料展2019	30日間	2605人
5/11~6/16 素晴らしい古墳との出会い—大塚初重スケッチ絵画展	37日間	4603人



団体見学の記録 2019年1月~6月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

【一般】 サードライフの会(9名) / 板橋料好会(20名) / 北部一心会(6名) / HCC(8名) / 船橋マスター学院(10期)(35名) / レガルの会(10名) / コーラウォーク(5名) / 渡辺圭三写真講座(19名) / フォーラム75(17名) / 松戸の会(30名) / 松戸市小金原6丁目7番小金原住宅組合老人会 ふれあい歩こう会(20名) / 岩井第二分館(45名) / 学校法人早稲田大学エクステンションセンター八丁堀校(33名) / 東京都若者社会参加応援事業 パナポート(5名) / 彩の国いきがいの大学 史跡めぐりクラブ(20名) / 悠遊会(10名) / 領家ウォーキングクラブ(14名) / 静岡商業高等学校同窓会関東支部女子同好会 SCあじさい(12名) / 生き生きセミナー 五期会(15名) / 健康づくりウォーキングクラブ(20名) / アメンボの会(23名) / 明治大学小平支部OB会(8名) / 朝日アウトドア教養講座(23名) / 四三会(13名) / 地名研究会(8名) / 医療法人社団利田会 周愛集鳴クリニック(25名) / 歩歩歩会(12名) / 気まま会(14名) / 第15分団31部(17名) / 年金者組合安房支部 観館くらぶ(23名) / 裁判所退職者の会(10名) / 大阪学芸大学附属天王寺中学校・高等学校天王寺校舎 東京同窓会(15名) / 坂のある街を歩く会(80名) / 史跡めぐりクラブ(20名) / 西東京市郷土文化会(35名) / 高津歴史散歩の会(18名) / 森木会(11名) / クラブツーリズム「東京の新発見旅へ千代田区編」(247名) / 彩の国いきがいの大学春日部学園19期校友会(30名) / 人間環境活性化研究会(15名) / 安生二十日会(8名) / ウォーキングの会(17名) / 所沢市民大学派生サークル「江戸文化を訪ねる」(10名) / 東大和文学散歩の会(15名) / ACAP友の会(9名) / 世田谷区シニア32会(8名) / 柏史会(13名) / わくわくサークル(5名) / 埼玉県立川口高等学校PTA(23名) / 鬼平ツアー(7名)

【小・中学校】 栃木県佐野市立流出原小学校(20名) / 川崎市立金程中学校 2年生(6名) / 川崎市立中原中学校(6名) / 山東省中小生読書会(19名) / 東村山市立東村山第二中学校(61名) / 国分寺市立第三中学校(6名) / 江東区立辰巳中学校(14名) / 葛飾区立立石中学校(4名) / 新宿区立西早稲田中学校(6名) / 大田区立田園調布中学校(5名) / 東大和市立第二中学校(6名) / 足立区立伊興中学校(13名) / 江戸川区立篠崎中学校(20名) / 明治大学付属明治中学校(18名) / 加須市立北川辺中学校 2年生(30名) / 三郷市立瑞穂中学校 2年生(14名) / 日野市立日野第二中学校(7名) / さいたま市立大宮西中学校 1年生(33名) / 鹿児島市立鹿児島島玉龍中学校 3年生(16名) / 学習院中等科 歴史研究部(12名) / 小浜市立小浜中学校(5名) / 盛岡市立厨川中学校(6名) / 若桜町立若桜学園中学校(5名) / 北海道伊達市立伊達中学校(6名) / 神戸市立神陵台中学校 3年生(36名) / 仙台市立茂庭台中学校 2年生(5名) / 福井県敦賀市立鹿角中学校(49名) / 中津川市立福岡中学校(11名) / 滝川市立明苑中学校(40名) / 敦賀市立栗野中学校(31名) / 羽島市立羽島中学校 3年生(7名) / 仙台市立蒲町中学校(4名) / 北秋田市立立川中学校(4名) / みなべ町立南部中学校(7名) / 神田女学園中学校(10名) / 海津市立城南中学校(8名) / 横浜市立上永谷中学校 2年生(13名) / 国分寺市立第二中学校(10名) / 刈谷市立朝日中学校 3年生(7名) / 新宿区立四谷中学校(17名) / 成田市立公津の杜中学校(24名) / 平塚市立江陽中学校(5名) / 高崎市立高松中学校 2年生(36名) / 豊田市立高橋中学校 3年5組2班(6名) / 名古屋市立本城中学校(8名) / 川崎市立南河原中学校(5名) / 千代田区立九段中等教育学校 1年生(32名)

【高等学校】 清真学園高等学校 地歴部(6名) / 龍野川女子学園高等学校(20名) / 熊本市立必由館高等学校 1年生(17名) / 高知県立構原高等学校 2年生(8名) / 法政大学第二高等学校 3年生(5名) / 茨城県立大洗高等学校(70名) / 埼玉県立伊奈学園総合高等学校(14名) / 武蔵野女子学院高等学校 1年生(20名) / 常磐大学高等学校(35名) / 駒場東邦高等学校(10名) / 神奈川県立大和南高等学校(7名) / 千葉県立稲毛高等学校 3年生(23名) / 神奈川県立上溝高等学校 2学年(3名) / 東京都立鷺宮高等学校 2年生(5名) / 茨城県立水戸第二高等学校 3年1組(36名) / 神奈川県立平塚中等教育学校(10名) / 神奈川県立横浜緑ヶ丘高等学校(6名) / 神奈川県立立川高等学校(6名) / 埼玉県立羽生第一高等学校(25名) / 茨城県立波崎高等学校(42名) / 明治大学付属明治高等学校(9名) / 茨城県立八千代高等学校(10名) / 常葉大学附属菊川高等学校 1・2年生(46名) / 栃木県立さくら清修高等学校 2年生(40名) / 東京学館新潟高等学校(5名) / 共愛学園高等学校 2年生(49名) / 大宮開成高等学校 2年生(72名) / 栃木県立今市高等学校 1年生(40名) / 東京都立美原高等学校 2年生(16名)

【大学・大学院・専門学校】 駒澤大学文学部(13名) / お茶の水女子大学 文教育学部 考古学通論2(6名) / 昭和女子大学(8名) / 東京電機大学(5名) / 明治大学法学部 山田道郎ゼミ(14名) / ヒューマンアカデミー(10名) / 青山製図専門学校(36名) / 文京学院大学(5名) / エンデラン大学交換留学生(8名) / 千葉商科大学商経学部(15名)

M2カタログ | 刑事クリアファイル販売中

常設展示されている資料『大岡政談天一坊実記』『衛門類例秘録』『牢内深秘録』を基に、大岡越前守や同心の羽織、牢屋敷の提灯などが描かれたデザインです。2019年3月から販売を開始し、早速人気グッズとなりました。展示をご覧いただいた後は、是非ミュージアムショップへお立ち寄りください。

ミュージアムショップ開室時間

月~金 10:00~16:30 土 10:00~12:45
※日曜日・祝日・大学が定める休日・8月1日~9月19日の土曜日は閉室
※販売品・価格・開室時間は変更をする場合があります。



刑事クリアファイル：100円 A4サイズ

M2ショップグッズ売上トップ3

(2019年上半期)

書籍・ポストカードは除く

- 1位 クリアファイル(ガウランド)
- 2位 手帳(ガウランド)
- 3位 考古マスキングテープ
- 3位 刑事クリアファイル



図書館ボランティア

図書室ボランティアの始まりは1994年です。当時、大学会館に考古学博物館があり、そこに図書室がありました。人が無断で立ち入らないように入口に机を置いて、「監視」していたそうです。

それから10年後、2004年に商品（商学部）、刑事（法学部）、考古（文学部）の博物館が統合し、現在のアカデミーコモン地下2階に明治大学博物館の常設展、付属の図書室は地下1階博物館事務室の隣に設置されました。今日までに図書室ボランティアは25年の歳月を数えてきています。

当初、5人で始まったボランティアですが、現在では30人以上の登録メンバーがいます。しかし、シニア世代が中心ですので種々理由があり常時活動しているのは20数名です。

当図書室には約10万冊の書籍がおさめられています。中でも全国の発掘調査報告書は国内随一の充実度とされています。来室者のほとんどはこの発掘報告書を閲覧に来ています。明大の学生が多いのですが、他大学の学生、教員、研究者、そして友の会会員などで、年間5,000人を超えています。

私たち受付ボランティアは利用手続きを担当しています。月に1～2回程度の活動ですが、「ものすごく忙しい」ということはないので、受付をしながら読書をしたり、ご自身の勉強をしたりなどは自由にできます。静かでアカデミックな雰囲気が好評です。

受付ボランティアは図書室の蔵書を多くの方に利用していただき、資料の活用を図るとともに、蔵書に対する不正が行われないように抑止する機能も持っており、大切な文化資料を保全する役目も担っています。

最近、資料整理のボランティアを新たに設置しました。蔵書は時々行方不明になったり迷子になったりするので、その整理が主な仕事です。

図書室のボランティアに関心のある方は、友の会までご連絡ください。

明治大学博物館友の会 連絡先

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学博物館気付 博物館友の会
メールアドレス: meihakutomonokaig@gmail.com

※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。連絡は必ず「ハガキ」または「Eメール」でお願いします。

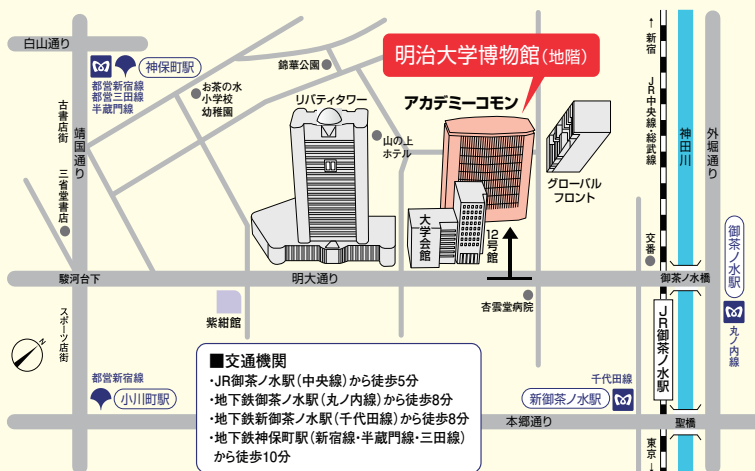
博物館案内

展示室ご利用案内

- ◆ 開室時間
10:00～17:00（入館16:30まで）
- ◆ 休館日
夏季休業日（8/10～8/16）
冬季休業日（12/26～1/7）
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆ 観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆ 開室時間
月～土 10:00～16:30
 - ◆ 閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
夏休期間（8/1～9/19）中の土曜日
- ※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※ご利用は蔵書の閲覧・コピーのみとなります。



編集後記

巻頭特集では、10月より開催中の雪野山古墳展をとりあげました。昨年度の特別展で注目したウィリアム・ガウランドの古墳研究から約100年、日本各地で古墳の発見が続き、研究は進化し続けています。雪野山古墳もまた、古墳時代の社会を考える上で重要な資料を提供しています。ぜひ、古墳研究の最前線に触れてみてください。